



| | |
|--------------|---|
| Title | 日本留学経験者のキャリアの発達と日本語教育 |
| Author(s) | 小澤, 伊久美; 丸山, 千歌 |
| Citation | 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 162-163 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/102029 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ Column 9 ≫

日本留学経験者のキャリアの発達と日本語教育

キーワード：キャリア、日本語学習者、複線径路等至性アプローチ（TEA）、
career、learners of Japanese、Trajectory Equifinality Approach (TEA)

日本に暮らす外国人と留学生

法務省の調べでは2022年末現在日本に暮らす外国人の数は307万5,213人、在留資格別の内訳では「留学」は30万638人で「永住者」「技能実習」「技術・人文知識・国際業務」に次いで4番目に多い。背景には、日本のグローバル戦略の一環としての、高等教育等における留学生の受け入れ及び送り出しの機会拡充施策がある。2023年には教育未来創造会議が新たな受け入れ・送り出し計画を提言しており、さらなる増加が予想される。

日本語学習者のキャリアの発達－日本留学経験者を対象とした調査から－

日本語学習者のキャリア、つまり「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」（中央教育審議会, 2011, p.17）は、外国にルーツのある子どもや若者、就労者、留学生、生活者、海外の日本語学習者など、学習者のタイプ別に取り上げられることが多く、留学生は、ビジネス日本語やインターンシップへの参加などのキャリア形成支援や就職支援が主に論じられている。しかし、似た経験をした個人が同じ道を歩むとは言えないことから、個人に着目し、その発達に何がどう関与して変容を促すのかの考察が必要となっている。なお、筆者らは「発達」を時間的経過とともに完成されていく変化、何らかのプラスの価値に近づくものとしてではなく、生涯にわたって展開される変化の過程として捉えている。そのため、完成したゴールを目指した変化であることを含意する「キャリアの形成」という用語は先行研究に言及する時以外には用いず、「キャリアの発達」という用語を用いている。

筆者らは、調査協力者に寄り添って内面探索を促すインタビューが可能な個人別態度構造（PAC）分析と、個人が経験した時間の流れを重視して非可逆的な時間の流れの中で個人の「ライフ（生命・生活・人生を区分せずに包括的に捉えた概念）」の径路を探索する、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた研究に取り組んできた。対象は、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業した後、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した日本留学経験者である。調査の結果、彼らが日本語を通して切り拓いているキャリアは、職業選択以外の多様な要因が絡む複雑なものであることがわかってきた。

例えば、調査時点でフルタイムの翻訳者として日本で働いていたA氏の場合、日本語学習は、フルタイムの翻訳者に至る径路において欠かせないものであったが、その後A氏の言葉で言う“Passive な力”として位置付けられるようになっていた。また、母国や日本の友人とのつながりや留学先の大学職員からの仕事の依頼など、人生の様々な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、自身の将来を考えるきっかけになっていた。

英語教育に従事していた B 氏にとっても日本語学習は、ある時期までは重要で、日本で生きていく自信をもたらすための欠かせない要素であった。同時に、日本人のコミュニケーションスタイルや行動様式が「居心地の良さ」をもたらすものであるという、自身の価値観の気づきにつながる経験も人生の径路において重要な要因であった。その B 氏が後に「日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う」に至るには、「教員や生徒との関係が良い」「公私ともにうまく行く」「色々な教師と出会い、ネットワークが広がる」といった人間関係に関わる力も働いていた。

日本国内で常勤大学職員として勤務していた C 氏は、国に戻ることは常に選択肢にあるものの、日本は“a place where I feel comfortable”だと考えていた。その際、仕事や信仰のことなどを話したい相手、つまり自身を知り理解してくれる人が日本にすることが重要な要因であった。また、C 氏にとって大切な「信仰と人との交わり」は言語使用と密接な関係にあり、日本留学時の自身の日本語力によって、英語で祈りたい、相手の言葉である日本語で祈りたいなど、日本語環境との接し方に大きく作用していた。さらに、長期化した日本滞在により自身にとって当たり前になっていた日本の魅力を、来日した友人に日本を案内する中で改めて感じるなど、日本以外の場所にいる友人との接触も C 氏のライフの径路に作用していた。これは B 氏からも類似の経験が語られている。

大学の非常勤講師、特任教員を経由して調査時現在は研究所の所員として勤務していた D 氏の場合、日本に住むことの魅力も作用しているが、インターネットや IT が発達して、どの言語を使用する必要があるかが、必ずしも居住地によって規定されないといった社会の様相も径路に影響を与えていた。D 氏には、日本や日本のサブカルチャー、あるいはより広く日本の表象文化に関わり活躍することで自己実現を果たしたいという強い気持ちがあるが、前述の社会的状況や英語による日本研究が盛んになったことから、日本の表象文化に関わり活躍するために日本語を学ぶ必要があったのかという葛藤を感じるようになったこと、日本に定住する必要があるかについても自問していることが明らかになった。

日本語教育への視座

日本留学経験者らのキャリアの発達は、人生のステージやその時の日本語力はもちろん、社会的状況や制度面、人的ネットワークなど様々な要因関わったものであり、日本語・日本社会との関わりを通じた自己実現のプロセスであると言える。日本語教育は、緩やかに、そして多様な形で彼らのキャリアの発達に関与できる可能性を持っている。日本語教育関係者は、日本語教育の提供のみでなく、このような有り様に対する理解を深めて、受け入れに関わる多くの人々や機関にこの可能性を伝える役割を担うことも求められている。

引用文献

中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」

小澤 伊久美 (国際基督教大学)・丸山 千歌 (立教大学)